

アスペン賞に輝いたコミュニティカレッジ

—— 『高等教育クロニクル』の記事より ——

宮 田 実 (訳)

“Aspen Competition Drives Innovative Ideas for Community Colleges”

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

第1回アスペン賞

2011年12月、優秀なコミュニティカレッジに授与されるアスペン賞の第1回目の最優秀校としてヴァレンシアカレッジが選ばれた。これまであまり注目されなかったコミュニティカレッジが世間の注目を浴びた瞬間だった。受賞スピーチも終わり賞金もすでに支払われた今、アスペン協会は1年間におよぶ審査過程を振り返る。全米トップのコミュニティカレッジを決めるという大仕事であった。

ホワイトハウスでのコミュニティカレッジサミットにおいてオバマ大統領が受賞校を発表した。この賞の創設の目的はコミュニティカレッジの注目度を高めるとともにその学習効果、卒業率、就職率などを高めるために考え出された優秀な施策を奨励することである。

フロリダ州オーランドにあるヴァレンシアカレッジの受賞の背景にはレベルの高い統計数字がある。例えば、フルタイム学生の半数以上が3年以内に卒業するか4年制大学に編入している。この数字は全米の平均39%よりもかなり高い。さらに同校は高い就職率を誇っている。ヴァレンシアカレッジのシュガート学長によれば、同校の成功の要因はただ単に学生を数多く集めるのではなく、入学した学生が編入学や卒業や就職ができるよう最

大限の援助の手を差し伸べているということである。

アメリカの教育の質を高めることを目的とするルミーナ教育財団のメリソティス理事長は次のように述べる。「すべてのコミュニティカレッジがヴァレンシアカレッジのようになる必要はないんですよ。成功例をよく研究することにこの賞の意義があるのです。」

アスペン賞を目指したコミュニティカレッジは120校にのぼった。アスペン協会の審査委員は書類選考で上位10校を選び、そして最終審査のため10校のキャンパスすべてを訪問した。各キャンパスは立地も広さも学生数も異なっていたが、いくつかの共通点があることがわかった。それは効率的に学習成果をあげるカリキュラムであり、教員の教育に対する熱意である。例えばウェストケンタッキーコミュニティアンドテクニカルカレッジでは学生の読解力をつけるために英語担当教員から自動車工学担当教員に至るまで教員に対する特別なトレーニングを実施していた。また、ワラワラコミュニティカレッジでは学生が毎学期指導教員と面談することを義務付けている。アスペン協会のワイナー局長は「最終審査に残った10校の教職員は常に改善のための努力をしています。そして、いつも熱意をもって仕事をしています」と言う。

最優秀賞を受賞したヴァレンシアカレッジは賞金60万ドルを獲得した。優秀賞の4校(ワシントン州のウェストケンタッキーコミュニティアンドテクニカルカレッジとワラワラコミュニティカレッジ、サウスダコタ州のレイクエリアテクニカルカレッジ、フロリダ州のマイアミデイドカレッジ)はそれぞれ賞金10万ドルを獲得した。現在の経済情勢下では賞金は重要な意味を持つが、それより重要なのはコミュニティカレッジがお互いに良い影響を与えあい、学びあうことである。

アメリカのコミュニティカレッジは4年制を含めた全大学生の約50%の教育を担っている。現在1,200校あるコミュニティカレッジで600万人の学生が学んでおり、地域の職業人を育てるというニーズに応えている。高い失業率と2018年までに全米の職業の60%が何らかの高等教育を必要とするという統計数字を見ても、今後コミュニティカレッジの果たす役割がいかに大きいかがわかる。

職業訓練教育

コミュニティカレッジの2つの大きな使命、即ち、4年制大学への編入学教育と充実した職業訓練教育は4年制大学との大きな相違点である。この2つの使命は「一般教育」と「職業教育」と呼んでもいいだろう。

アスペン協会のワイナー局長は「一般教育担当者が職業教育から学ぶことは多いと思います」と言う。職業教育のカリキュラムは、評価機関からの特別な評価を得るためのデー

タを残す必要があるので、卒業率や就職率を強く意識したものになりがちである。ワイナー局長は「職業教育担当者の説明責任は重要ですが、この意識は一般教育担当者も含めてすべての教職員が持つべきものです。良い結果を出そうと思ったら学生をしっかり教育することが重要です」と付け加える。

アスペン賞の審査員は準学士の学位取得者のみが卒業生だという考えは改めなければならないと指摘する。コミュニティカレッジにとって1年で取得できる修了証も連邦政府の教育目標をクリアするためには重要なものとなる。米国在住のラテンアメリカ人学生をサポートする団体の副代表のサンティアゴ氏は最終選考の時になるほどと思う瞬間があったと言う。即ち、彼女はコミュニティカレッジが多くの短期コースの資格認定書を授与していることに気付いたのである。彼女は次のように言う。「高等教育は準学士や学士の学位にばかりに焦点を当てる傾向がありますがそれ以外の資格認定にも注目する必要があります。このような資格を取得する学生が数多くいます。しかし、彼らは卒業生とはみなされないのです。」

工夫されたカリキュラム

アスペン協会によれば、コミュニティカレッジの成功は伝統的な手法と革新的なアイデアを融合させることにある。コミュニティカレッジにはオンライン学習とキャンパスでの学習を組み合わせるといった柔軟性のあるカリキュラムがある。しかし、優秀賞を受賞したレイクエリアテクニカルカレッジはそれとは異なるやり方を採用した。小さな町にあるこのカレッジでは1,400人の学生のほぼすべてがフルタイム学生であり、小グループに属する学生が協力し合って学んでいくのである。出席は必須で3回欠席すると担当者から連絡がはいる。補習が必要な学生は仲間の学生と合流する前にまずオンラインで課題をこなさなければならない。レイクエリアテクニカルカレッジでは多くの数学と国語の基礎クラスをランチタイムに設定している。

学生の成長を重視したこのような厳しいカリキュラムは成功している。同校の学生の3分の2は3年以内に卒業している。そして、就職率は90%を超える。このような集団学習プログラムや学生の選択肢を制限するという手法は今やコミュニティカレッジの重要な戦略となっている。

学生数が9万人を超えるマイアミデイドカレッジでは基礎学力が不足する学生に対して特別コースを設け、さまざまな基礎クラスと時間の管理法を教えている。この特別コースのおかげでマイノリティ学生の卒業率が2倍になった。

ヴァレンシアコミュニティカレッジではクラスが始まってから登録をする学生の卒業率

がよくないので、そのような登録を禁止した。その代替策として学期の開始1か月後に始まるフレックスクラスを導入した。

教授法の研究

大学の卒業率を上げるためには教員の協力が不可欠である。最終審査に残った大学には教育に熱心な、そして教授法の研究に熱心な教員が多かった。ワイナー局長は「教員の口から出たのは『どうしたら学生にもっと良い教育ができるのだろう』という問いでした」と言う。ヴァレンシアコミュニティカレッジでは専任教員は教授法に関する3年間の研究プロジェクトに参加し、より良い教授法を追及する。うまくいきそうなアイデアは教室で試行される。あるプロジェクトで、ある教授は基礎読解クラスですべての学生に同じ課題を与えるのではなく個々の学生に対して個々の課題を与えた。この新しい方法はうまくいき、同校の一部のコースで採用されている。

教員が新しいことを実践しているのはヴァレンシアコミュニティカレッジだけではない。マイアミデイドカレッジでは教員が一致団結して新しい教授法をいくつか試行して数学の単位取得率を上げるのに成功した。代数のクラスで出題範囲を小さくして小テストの回数を増やすことによってうまくいった例もある。

アスペン協会の試み

全国のコミュニティカレッジに成功例を伝えるためにアスペン協会は努力を惜しまない。さまざまな大学を回って学んだことやアスペン賞選考の過程は毎年4月に開催されるアメリカコミュニティカレッジ協会の年次大会やその他の会議やワークショップで紹介される。最優秀賞や優秀賞を受けた大学のプロフィールはアスペン協会のウェブサイトが大きく取り上げられる。そして出版についても現在検討中である。

前ミシガン州知事でアスペン賞の審査員でもあるイングラー氏は授賞式で次のように述べた。「受賞校を見てわかるようにコミュニティカレッジは学生に高度な教育を受け卒業後の即戦力を育てることができるのです。ヴァレンシアコミュニティカレッジや他の受賞校の実践例を他のコミュニティカレッジが試みれば学生にとっても雇用者にとってもひいてはアメリカ経済全体にとってもとても良い効果を生み出すと思います。」

アスペン協会は今後も毎年優秀なコミュニティカレッジに賞を授与し、同時にさまざまな方法でコミュニティカレッジを支援していく予定である。同協会はコミュニティカレッジへの支援、特に低所得家庭の学生やマイノリティ学生の支援を目指す全国的非営利団体『夢の実現』と協力して未来のコミュニティカレッジの学長を育成しようとしている。こ

の2つの組織は現在あるリーダーシッププログラムを発展させたカリキュラムを開発している。ワイナー氏は、さまざまなキャンパス訪問を通じて得た情報を参考にして新しいカリキュラムができあがるだろうと言う。優秀な学長を育てることはコミュニティカレッジの成功、ひいては学生の成功につながるのである。ワイナー氏は「すべての学生は卒業してよい職に就くチャンスを与えられるべきです。私たちはそれを実現するために存在しているのです」と述べる。

(2012年1月6日号)

(Copyright 2012. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.)

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はジェニファー・ゴンザレス氏である。

今回のテーマはアスペン協会に選ばれた優秀なコミュニティカレッジについてである。このような賞の創設はコミュニティカレッジ間の競争を促し、その結果、コミュニティカレッジ全体の改善につながる。高等教育におけるコミュニティカレッジの重要性がますます高まる中、アスペン賞の存在は今後大きな意味を持つと考えられる。

日本では短大の4年制大学化が進み、その数は年々減少し、定員割れが大きな問題となっている。生涯教育時代の今、日本の短大がアメリカのコミュニティカレッジのような高等教育機関に変身することができればその恩恵を受ける人は多数にのぼるだろう。そのためには大胆な国家戦略が必要となる。

